

随想 ずいそう



棟方志功展を見る

大谷文彦



あろう。彼の芸術に関して深い造詣をお持ちの方もいると思う。そうした人々に伍して志功を語ることはおこまがしくもあるが、志功への思いとでも言うのか、志功ファンの最後列にあつて私なりの敬意と愛着とを述べてみたいと思う。

夏休みのある日、いわき市立美術館で棟方志功展を見た。彼の作品は、その死後三年程して刊行された全集によってひととおり目は通しているが、実際の作品を見るのは、二、三を除いてこれが初めてであった。

ゴッホのような絵を描きたいと願ひ、ゴッホのようにひたむきに生きて死んでいった志功。その志功の生涯にわたる仕事を間近に見ることができるとかと思うと、美術館の薄暗い展示室に入ろうとして、ちよつとした胸の高鳴りのようなものを覚えた。

もちろん棟方志功のファンは多いで

ではわからない量感に圧倒されながら、棟方版画の呪術性とも言うのか、森羅万象の美を描かないではおかない、彼の無尺蔵の世界を垣間見ることができた。そして、「湧然たる女者達々」「華狩頌」といった大作の前に立ち、憑かれるようにしてこれらの作品を彫り上げた生前の彼の姿を想像してみた。彼はベートルベン第九「歓喜」を口ずさみながら、版木に顔をこすりつけるようにして彫つたのだ。ここではもう労働がそのまま創造の歓びにつながっている。彫ることが生きることにつながっている。

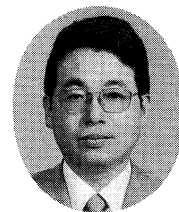
こうして彼の作品を眺めながら、私は自身の仕事のことを考えた。私にとって創造とは何なのか。教師である私にとっての創造とは何なのか。教師であることに慣れ、日々何ものかに追われるかのように流れてゆくこの日常にどれだけの創造があるのか。生み出されるものが具体的な形を持たず、生身の人間の心というたよりないものに訴えてゆくしかないこの仕事の難しさを承知しながらも、仕事がそのまま歓喜となった棟方志功の生き方にたまらない羨望を覚えた。

(県立白河実業高等学校教諭)



子どもの本当の姿は…

堀越正文



「あと少しで休憩だ。がんばれ」

自分自身に言い聞かせるように子どもたちに声をかけながら登り続ける…

今年もわが校の六年生は、二泊三日の宿泊訓練に那須甲子少年自然の家へ向かった。百四十四名の児童と八名の教師の気持ちははずんでいた。三日間の生活の中心はキャンプと登山である。登山は二日目。出発は八時。全員まだまだ余裕があった。山道のあちこちにはワレモコウ、サワギキョウの紫色の花、白いウメバチソウのきれいな花などが見られた。私たちは足どりも軽く登っていった。私たちは足どりも軽

がりには若手のW先生と養護の先生がついた。私は体力に自信が無く、真ん中につかせてもらう。なにせ、登山と呼べるような経験は数回の安達太良山と大学時代の三ツ峠山しかないのだ。そのうちに息が切れ足がもつれ、遅